葛藤　ルーフェイア・シリーズ04

こっこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
葛藤　ルーフェイア・シリーズ０４

【Ｎコード】
Ｎ１１３７Ｅ

【作者名】
こっこ

【あらすじ】
夢にまで見た世界には、思わぬ悪意がひそんでいた……。心優しい美少女が繰り広げる、異色学園ファンタジー第４弾◇◇本格的に学院生活を始めたルーフェイアと、周囲との話です◇◇反王道、「無情という名の条理がある」とまで言われた、ひたすらビターな世界をどうぞ◇◇携帯版は１行毎の改行です◇◇元７桁Ｈｉｔサイト掲載の改訂、シリーズの４作目です。ほぼ全面改稿となりました

Ｅｐｉｓｏｄｅ：０１　誤解

◇Ｉｍａｄ

「答案を返すぞ」

教官の言葉で教室ン中が、ざわっと騒がしくなる。

「まったくお前たち、何を勉強していた？　かなり平均点が悪いぞ」

そりゃお前の教え方が悪りぃんだろ……と内心つっこんだ。

夏開けてから変わったコイツ、メチャクチャ授業ヘタだ。教科書丸写しの棒読みするだけなら、授業なんざいらねーし。

教官は順々に名前読んでっけど、ようするにいつもの順番だから、俺らみんなさっさと立ち上がる。並んどいてさっくりもらって、あわよくば教官に帰ってもらおうって魂胆だ。

なんか知らねーけどこのクラス、その辺の団結力「だけ」はバツグンだった。

で、俺も答案もらって。

――あ、やべぇ。

頭ン中で点数計算してみたけど、どうもルーフェイアのヤツに、実技以外でもトップ持ってかれたっぽい。

分校飛び越えて本校へ入学したって時点で、バトルだけじゃなくて頭もそうとうだろうっては思ってたけど、あいつマジでハンパなかった。

実技で張り合うのは、最初っから諦めた。つか、ぜったいムリだ。

ただでさえいろいろ桁外れだってのに、それを実戦で鍛えたようなヤツ相手じゃ、はっきり言ってうちの先輩たちだってヤバい。

けど学科もあんだけってのは、さすがに反則だろう。
語学系は実際に使ってたらしくて、主な言葉はほとんど全部読み書きまでできる。魔法に関する知識なんかも、ふだん使いまくってるだけあって、腹立つほどきっちりだ。
古い家系だからか、歴史も暗誦するほどよく覚えてやがるし。
しかも当人、何が難しいのかも分かんねーときてる。

――やっぱカミサマっての、えこひいきだろ。
そういうのがいるかどうかってのは別にして、いろんなモン偏りすぎだ。
ルーフェイアのヤツ、クラス分けのテスト受けた時点で、飛び級の話まで出たんだとか。本人が嫌がったんでナシになったけど、教官たちマジで残念がってたから、けっこー本気だったっぽい。

あいつが嫌がった理由聞いたら教官たち、のけぞっちまうだろうけど。
「飛び級」が何か知んなくて、どっか他所へ飛ばされることだと思ったから断ったとか、度を越した無知だ。

それにしてもこの新任教科担任、本気でクズらしい。模範解答手ぇ抜いて、ルーフェイアの答案のコピー配ってやがる。いくらあいつの答えが正確で詳しいからって、やっていいコトと悪りぃコトがあるだろうに。
「あとは各自、模範解答と突き合わせて訂正しておくように」
挙句に、これだけ言って帰っちまうし。

「イマド、お前どうだった？」
悪友どもが寄ってくる。
「一問落とした」
「マジ？　つかそれ、ヤベぇんじゃん？」

こいつら、俺の答案奪ってくし。

「うわ、これ惜しすぎってやつ？」
「惜しくたって間違いだって。つか、返せ」
いくら俺でも、また答案破られたくない。

「細かいコト気にするなって。
にしてもルーフェイア、めっちゃデキるよな。さすがのお前も首席アブないってか？」
「実技と併せたら、あいつ相手じゃ最初っから取れねぇって」

Episode：02

実技のテストは学期の最後だけだから、こいつらルーフェイアの実力はまだ知らない。けどルアノンでの火事騒ぎだのなんだの見たら、ぜったいおんなじこと思うだろうし。

「ルーちゃんって、そんなすごいのか……」
「オマエが最初っから諦めるとか、ハンパねーな」

教室の後ろのほうを見っと、当のルーフェイアはひとりで、けどけっこう楽しそうだ。
もっともアイツのことだから、満点――配られたコピー見りゃ一目瞭然――が楽しいとかじゃなくて、学院生活自体がおもしれぇんだろう。

と、気配を感じたらしくて、こっちへ振り向いた。
視線が合う。
ちょっと首をかしげたルーフェイアに軽く手を振ってみせると、嬉しそうにこっちへ来た。

「ルーちゃん、満点すごいね！　おめでとう！」
「え？　あ、ありがとう……」
ヴィオレイのヤツ、すっかりルーフェイアの太鼓持ちだ。

「でも、どうして……知ってるの？」
コイツの天然ボケも、治る気配ねーし。
「おまえなぁ、たったいま自分の答案配られたってのに、もう忘れたのか？」
「あ！　やだ、どうしよう……」

今ごろ困るなと。

「だいじょうぶだいじょうぶ、満点なんだから問題ないよ」
「そう……なの？」
なんか丸め込まれてやがるし。

「そうそう、こいつみたいに点が悪いとかじゃないから、ぜんぜん平気だよ」
「どーせオレは頭ワルいよ、悪かったな！」
アーマルのヤツがヘソ曲げて、その隣でなぜかルーフェイアが脈絡もなく謝りはじめて。
どーしようもねぇほど、いつものしょうもないやり取り。

けどそのとき、なんか視線を感じた。
不思議に思って、さりげなく辺りを見まわす。
――なんだ？

女子どもが、敵意むき出しの瞳で、こっち見てやがる。
視線の先は……ルーフェイアだ。
こいつが満点取ったから、反感でも買っちまったのか。それともほかの理由か。
イマイチよく分かんねぇけど、なんかヤな感じがした。

Ｅｐｉｓｏｄｅ：０３

◇Ｎａｔｔｉｅｓｓ

答案用紙返してもらって、授業サボった教官が出てって、そのあと遊んでチャイムがなって。

これで午前中はおしまい。シーモアとあたし、それにクラスのほかの女子、みんなで食堂に行く事に。

しかも廊下へ出たら、いろいろいっしょにやる事が多いＢクラスの女子と会って、なんだか大所帯になっちゃったり。

みんなでわいわい、おしゃべりしながら歩いてく。

「ねぇ、シーモア、何点だったの？」

「９４。ナティエス、あんたこそ何点だったのさ」

あたしのいちばんの親友のシーモアって、けっこう美人。炎の色みたいな綺麗な赤毛を、肩くらいで切りそろえてるの。瞳ははっきりした翠。

あたしなんてふつうのブラウンの髪と瞳だから、すっごくうらやましい。

で、いつもちょっとぞんざいな喋り方する。でもそれがまた、カッコいいんだよね。

けど今日は、いまいち不機嫌な感じ。

理由ははっきりしてる。

じつは夏休み中、うちのクラスに新入生が入った。でもこれ、すっごく珍しい話。だってここ、本校のＡクラスなんだもの。

本校ってば分校からの選抜組みばっかりだから、年度途中の入学

とか、ふつうはゼッタイなし。次の春までどっかの分校にいて、試験受けて、それでやっと入れるとこ。
もちろん、あたしたちもやったし。

なのにあの子ったら、そういう常識ぜーんぶ無視して、年度途中でAクラス。
ただルーフェイアっていう新入生、めちゃめちゃデキる子だったのもホント。あの首席のイマドと平気で学科で張り合ってるし、なんか技能なんてもっと上みたい。

で、いままで次席だったシーモアったら、とうぜん首席争いから転落しちゃったわけで。
けど、そーゆー理由で怒ってるの、責める気になんない。だってあのルーフェイアって子――性格良くないんだもの。
さっきだってイマドたちと話してたし、今はいっしょに食堂へ行ったみたいだし。

どうもあの子ったら自分が可愛いの承知してるみたいで、男子とばっかり仲良くしてて、すっごいヤな感じ。媚びてるみたい
そのくせあたしたちが話しかけても、黙ってばっかり。ちょっと付きあおうって気さえないの。

しかも、どっかのお嬢さまだってウワサ。だから持ち物なんか、一流品ばっかり。ときどき実地訓練の時に持ち出してくる太刀なんて、あたしたしが見ても分かるくらいのモノだったりする。

こっちはみんな親ナシとかで、そんなもの絶対手に入らないの、分かってるの？
だから最初はみんなで気を使ってあげてたけど、最近はもうこっちから話しかけたりしなくなってる。

「あの子さ、なんで学院なんかに来たんだろうね？　ここってどっかのお嬢さんが来るとこじゃ、ないじゃない？」
「そうだよね。そういうのなら、ちゃんと本土に専用の、お嬢さんＭｅＳあるんだし」

どう考えたって、シエラの本校ってドレス着て踊るとこじゃない。バトル教えるところだもの。
そりゃ確かに彼女強いみたいだけど、でもバトル屋っていう雰囲気じゃないし。

Episode：04

「ムカツクな～。お遊びじゃないんだよね」
ぼそっとシーモアが言った。
「だよね」
思わず同意しちゃう。

あたしたちほとんどみんな、帰るとこもない。だから気合の入り方だってハンパじゃないんだから。
ちなみにあたしは両親がいない。八歳の時に死んじゃった……はず。

じっさいは、いったい何がどうなったのか説明してくれる大人がいなかったから、今だにわかんない。ただたぶん、自殺したんじゃないかって思ってる。
だってあたしが小さい頃は会社やっててけっこうお金があったけど、そのうちよく「お金がない」って言うようになったから。

ともかくある日突然両親が死んだって言われて、家を追い出されて、親戚のところへ連れてかれて。
でもそこ、どうやってもいいところじゃなくて。たまりかねてその家を抜け出して街をうろうろしてたとき、シーモアに会った。

彼女のほうはスラムの生まれで、あたしと会った頃にはしっかりストリートキッズしてた。
家出したあたしがどうにか路上生活できたのは、彼女のおかげ。同い年だけど、巡り巡ってこの学院へ来るまで、ずいぶんいろいろ面倒みてもらった。

我ながら、苦労してるかなって思う。けどこれあたしだけじゃなくって、学院に居る子って、だいたいそんな感じ。
でもあの子ったら、そんな雰囲気ない。いつもすっごく楽しそうにしてる。
きっと帰る家もあって両親もいて、お金にだって困ったことないんだろうな。

「なんか……バカにしてるよね」
「へぇ、ナティエスでもそう思うんだ？」
あたしがぽろっと言った言葉に、誰かが相槌をうった。

「でもさ、ほんとそうだよね。なんかあの子、チャラチャラしてるし」
「お嬢さんだから、しょうがないって？」
「でもさぁ、もうちょっと考えたっていいんじゃない？」
「そうそう。いっくらカワイくたって、あの性格じゃね」
みんな、おんなじことを思っているみたい。

「シカトしちゃう？」
「シカトって、いまだって似たようなもんじゃん」
「あ、そうか」
広がるクスクス笑い。

「そういえばこれ、ミルにも言っとく？」
誰かが言った。
「ミル？　放置でいいんじゃない？　どうせあの子、メチャクチャだし」
「そっか」

名前の出たミルって子は、すっごい変わり者。悪い子じゃないん

だけど、やること成すこととんでもなく常識外れで、周りを振り回す天才。
だからこういうコトには、さいしょっから人数に入れないほうがイイと思うし。

「世間知らずのお嬢さんには、思い知ってもらうさ。ここがどんなとこかっての」
シーモアの言葉に、みんなうなずいた。

Episode：05

◇Ｌｏａ　ｓｉｄｅ

「ルーフェ遅いな、何してんのかな、教室まで見に行こうかな」

「落ち着きなさいよロア」

うろうろと歩き回る同級生を、エレニアがたしなめる。

午前のカリキュラムが終わった昼休み、広いはずの食堂はこの外から見える部分だけでも、かなり数の生徒たちでごった返していた。

「そもそもクラスの子と仲良くなって、私たちと食べなくなるなら、そのほうがいいって言ってたじゃない」

「それはそうなんだけどさ……」

そのあいだもロアは、しきりに低学年の校舎へと視線をめぐらせる。

「それにしても、変われば変わるものねぇ。あんなに後輩と相部屋になるの、嫌がってたのに」

「だってあのコ、カワイイんだよ」

ロアとルーフェイアはクラスはもちろん、学年も校舎も違うので、朝部屋を出ると夕方まで顔を合わせることがない。だが年度途中の入学では、何かと慣れずに困るだろうと、ロアはルーフェイアといっしょに昼食をとるようにしていた。

もちろん当の本人には、「友だちに誘われたらそっちを優先」と、きちんと言い渡してある。

だが引っ込み思案なルーフェイアは、まだそこまで行かないようだ。だいたい同じ時間に、いつもここへ来て、ロアたちといっしょに食べていた。

「あ、ほら、来たわよ」
エレニアが指差すほうを慌てて見ると、たしかにあの目立つ金髪があった。
「あら、今日はクラスの子といっしょみたいね」
「ほんとだ」
ただ、顔ぶれはロアも見知ったものだ。

「おとなしいのに男子と仲いいとか、ルーフェも面白いなぁ」
たしかあの子の話では、イマドという同じAクラスの男子に、シエラへ誘われたと言っていた。いっしょに居る中で、いちばん大柄の子がそうだ。
手を振ると、ルーフェイアが嬉しそうに早足になって、目の前まで来る。

「今日はみんなと来たんだね」
「はい」
にこにことうなずく――この子のこういう顔はそう多くない――少女に、ロアは少し考えてから言った。

「エライエライ。
そしたら今日は、ボクたちいないほうがイイね。ルーフェ、みんなとゆっくり食べておいで」
「え……」
そんなことを言われるとは思ってもみなかった、そういう表情だ。

「先輩、コイツ先輩とメシ食うって、ここまで来たんですよ?」
「けどせっかく友だちと来たんだよ、やっぱりここは、クラスメイトといっしょに食べなきゃ」
ルーフェイアがクラスの子と馴染めないのは、こうして自分がい

っしょに昼食を食べているせいではないか、そんな気がしてならない。

と、エレニアにつつかれた。

「ちょっとロアってば」

「え？　あ！」

やり取りが悪かったのだろう、ルーフェイアが下を向いて泣きそうになっている。

Episode：06

「わわわ、ルーフェ泣かないで！　ゴメン、ちゃんといっしょにご飯食べるよ！」
　苛酷な環境から抜け出したばかりの少女は、まだかなり情緒不安定で、ちょっとしたことで泣き出すのだ。
――単に泣き虫の可能性もあるが。
　どちらにせよ、このまま泣かせておくわけにはいかない。

「と、ともかくホラ、いっしょに食堂行こ」
　慌てて手を引いて食堂へ向かおうとすると、一瞬ルーフェイアが、クラスメイトのほうに視線を向けた。
（なるほど）
　さすがにこんどは、この子の望みがロアにも分かる。

「ほら、そこの3人！　キミたちもこっち来て、いっしょにご飯食べなさい」
「へ？　オレらっすか？」
　そういうつもりはなかったのだろう、彼らが面食らう。
「オレら、食堂までいっしょに来ただけなんスけど……」
「こらこら、先輩の言うことはきかなきゃダメだろ。ルーちゃんとご飯食べられるなんて、うん、大賛成」
　このあたりはいっしょにつるんでいても、温度差があるようだ。

「けどなぁ……」
　今ひとつ煮え切らないクラスメイトの前で、ルーフェイアが悲しそうに視線を落とした。
――　一撃必殺。
「あー分かった分かった、いっしょに食うから泣くなっての」

「そそ、ルーちゃんだいじょうぶ、心配しなくていいからね」

エレニアが、やれやれとため息をついた。

「まったく、みんなルーフェイアには弱いわよねぇ」

「そう言われてもさー」

なぜと問われたら困るのだが、この子を見ていると、守ってやらなければならない気がしてくるのだ。年より小柄で、性格も幼いせいかもしれない。

そんなルーフェイアを真ん中に、ぞろぞろと食堂へ移動する。

シエラの食事のメニューはシンプルだ。日替わりで朝は一種類、昼夜は二種類のセット物、あと飲み物がお茶など何種類か。ただおかわりは自由だし、味もけして悪くない。

何よりここに来る子の多くは、満足に食事もできなかった時期がある。そのせいもあって、タダでお腹いっぱい食べられればとりあえず十分、という子がほとんどだった。

「ルーフェはさっぱりセットだね」

「あ、はい」

選んでやり、そろえてやり、席を取ってやり、重そうなら代わりに持つ。孫に甘い祖父母もかくやというほどの、可愛がりぶり過保護ぶりだ。

「ルーちゃん良かったね、先輩にすごく可愛がってもらって」

「いや、なんつーか、可愛がりすぎだろ」

「そうよねぇ、私もちょっと心配で」

うしろでエレニアはじめ、一同のそんなつぶやきが聞こえたが、ロアは気にもしない。

Episode：07

「これでだいじょぶ？　椅子遠くない？」
「だいじょぶです」
そんなやり取りを横目に、ほかのメンバーもテーブルに着く。

「イマド、そんなに……食べるの？」
同級生の昼食の量を見て、ルーフェイアが目を丸くした。おそらく二人前は、ゆうにあるだろう。
「ふつうだろ。てか、これじゃたぶん足りねーし」
「え……」
同年代の子をあまり知らない少女には、かなりのインパクトだったようだ。

「つか、お前が食わなすぎだって。そんなんで夕メシまで持つのかよ」
「イマド、お前とルーちゃんを同じにするなよ。かわいそうじゃないか」
すかさず外野が茶々を入れる。
「オマエ図体デカいから、そのぶん食うもんなー」
「るっせ」

軽快なやり取りのあいだで、少女は楽しそうだ。ロアが見るかぎり、ルーフェイアはこの男子たちとは、上手くやれている。
しゃべりながらの、昼食の時間が始まった。つまらない話でしらけてみんなから突っ込まれてみたり、おかわりをしに行ったりと、なかなかにぎやかだ。
「あー、オレ今学期のテスト、ヤバかったんだよな。マジ勉強しな

いと」
たあいない会話の中から、唐突に深刻なものが飛び出す。
「たいへんだな、頑張れよ」
イマドは他人事だ。たしか彼は入学してからずっと、学年のトップを独走している。だからテストなど、どうということもないのだろう。

「テスト……悪いと、ダメなの？」
ルーフェイアが、不思議そうな顔をした。
「あーそっか、ルーフェは知らないか」
学院へ来て日の浅いこの子に、ロアは説明する。

「こないだテストやったでしょ？　あの成績の総合で、翌年のクラス分けが決まるんだよ」
この学院は全体的に、生徒の自主性を重んじる。だがそれは同時に、生徒たちに相応の責任も負わせるものだ。
勉強しろとは一言も言わないが、成績が落ちれば容赦なく降格する。規律も守れとは言わないが、破れば即ペナルティーが課される。

しかもこれらが積み重ねれば、強制退学だってあり得るのだ。だから、どの生徒も必死だった。
だがこの少女は、まだよく分からないようだ。
「クラス、分け……？」
きょとんとした表情で、首をかしげている。

「えーっと、これでダメだと、どう説明すればいいのかなぁ」
「先輩、放っといたってそのうち、イヤでも覚えますって」
「それもそうか」
この子が学院へ来てから、まだいくらも経っていないのだ。焦ることもないだろう。

Episode：08

「ルーフェイア、私デザート取りに行くから、食べるならいっしょに行きましょ」
「あ、はい」
エレニアに声をかけられ、少女も立ち上がる。

質問ではなく提案の形を取るあたり、彼女もいいかげん慣れてきたと、ロアは思った。おとなしいうえに日常生活全般でズレているルーフェイアには、こうして道を作ってやり、選ばせたほうがスムーズだ。
何より彼女ひとりでは、「選べない」という致命的な問題もあった。

二人が仲良く話しながら、離れていく。
「今日はなににする？」
「えっと……」

その後ろ姿を見送るロアの視界に、低学年らしい女子の集団が入り込んできた。
――昼食に似つかわしくない、異様な雰囲気。
一様にルーフェイアのほうに視線をやるさまは、どこか殺気立っている。
ロアは考え込んだ。

面倒見がよく美人のエレニアは、後輩に人気がある。いわゆる「お姉さま」として憧れられるタイプだ。
そのエレニアに、親しげにルーフェイアがくっついているから、妬まれたのか。

一団の中心は、赤い髪の子のようだ。他より少し背が高いうえ、堂々とした振る舞いで、遠目にも目立つ。

「先輩、エレニア先輩ついてんだから、いくらルーフェイアのヤツがボケてても、平気ですって」

「違うってば」

それもたしかに心配だが、今はそれよりもあの一団のほうが気になる。

「さっきから何見てんです？」

「うん、あの集団なんだけどさ」

指差した先を見て、男子三人が口々に答えた。

「あれ、ウチのクラスの連中ジャン？」

「Bクラスの女子も、いっしょじゃないかな」

「だな」

訊けばルーフェイアたちと同じAクラスの女子と、合同授業でいっしょになることが多いBクラスの女子、両方合わせた一団らしい。

「なんで、あの子たちいっしょに……」

「女子ども、数があんまいねぇから、合同クラスともよくつるんでますし」

「それは分かるってば」

気になるのはそんなことではなく、なぜ彼女らがみな、同じような敵意を見せるのかだ。

エレニアのファンというだけならいいのだが、ルーフェイアと同じクラスというのが引っかかる。

（まさか……）

イヤな予感がした。

Episode：09

◇Ｉｍａｄ

ロア先輩の「予感」は当たってた。

おとなしくて引っ込み思案なのもあって、ルーフェイアのヤツは前から女子と馴染めねぇだけと思ってたけど、どうも違ったみてぇだ。

つか、ここんとこもっとあからさまで、聞こえよがしにいろいろ言うヤツまでいるし。

仕切ってんのは、シーモアのヤツだろう。スラムあがりのあいつは性格がキツいうえ、良くも悪くも統率力はある。

ただ幸い、いまんとこ持ち物に手出されたりはしてないっぽい。むしろヤバいのは、クラスの雰囲気のほうだ。

このクラスは女子は少なめだけど、そんでも数人はいる。これがツルむとすげぇうるせぇし、口じゃまずかなわねぇ。しかも中心にいるシーモアのヤツは、ケンカもハンパなく強かったりする。

このせいでＡクラスの男子連中も最近は、ルーフェイアに近づかなくなってた。シーモアたちにからまれたらヤバい、ってんだろう。

ただ当のルーフェイアのほうは、まだ状況を理解してない。自分が簡単には馴染めないと思ってるから、そういうもんだとヘンなとこで納得してる。

「数学と理科、どうしよう……」

ルーフェイアのヤツが心配そうに言う。テストの点が、この二つはこいつ、イマイチだった。

――あれで「どうしよう」とか言われたら、怒るヤツ山盛りだろう

けど。
そんでも当人に取っちゃ、大問題だ。
「おまえ、難しく考え過ぎなんだよ。単純に公式だけ当てはめてけって」
「だって……」
ちょっと視線落として、困りきった表情しやがる。
「ったくしょうがねぇな、教えてやるよ。移動すっぞ、自習室な」
「いいの？」
ひさびさに、こいつの表情がほころんだ。
「いいって。つか、荷物取ってこいよ」
「うん」
ルーフェイアが荷物を取りに、自分の席へ行く。シエラは成績順で席が決まるから、ホントならあいつは前のほうだけど、途中入学の関係でいまはいちばん後ろだ。
――って、なんだ？
たむろってる女子のあいだを通り抜けるルーフェイアに、足出してるヤツがいる。どうも引っ掛けて、転ばせようって魂胆らしい。
まぁやられてんのがルーフェイアだから、ほとんど無意識に避けちまって、意味ねぇんだけど。
ただ状況は、俺が思ってたよりさらに悪りぃってことだ。
気になってそのまんまルーフェイアのやること見てっと、こいつが机の上に手を伸ばした瞬間、かすかに空気がふるえた。
けど、そんだけだ。つか空気がふるえたのだって、ほかの連中は気づいてねぇだろう。

ルーフェイアのヤツが、教科書だの抱えて戻ってくる。
「おまえさ、机んとこ、なんかしてあんのか？」
「えっと……結界のこと？」
よく訊いてみっとこいつ机だのなんだの、ともかく自分だけが使う場所ならそこらじゅうに、簡単な結界張ってるらしい。

「なんでそんな、面倒なマネすんだ？」
「え？　持ち物って、放置……しないでしょ？」
なんか激しくズレた答えが返ってきやがった。
「盗まれたり、攻撃で壊されたら、困るし」
「ここで攻撃はねぇだろ……」
危機管理って意味じゃ間違ってねぇけど、ちと行きすぎだ。

けど、それを言うつもりはなかった。なんせ状況が状況だから、このまんまにしといたほうが、ぜったい被害が少ねぇはずだ。
なるたけ手を出されねぇ状態を保って、そのあいだにどうにかする。自分でもモヤモヤすっけど、こんくらいしかテが思いつかない。

Episode：10

「行くぞ」
「うん」
俺自身も含めて、いろんなモンに腹立つのを押し隠して、部屋を移る。

「あのね、ここ……」
移動するなり、ルーフェイアのヤツが訊いてきた。
「あーこれか。勘違いするヤツ多いからな」
「そう、なんだ」

解法が複雑になってくっと、ルーフェイアは弱い。特に逆転の発想、みたいなヤツが苦手だ。
「あと、この計算……」
「おまえこのへん、根本的なとこ分かってねぇだろ。図にしてみろって」
「え？　だってこれ、ただの計算……」

首をかしげるこいつの目の前で、簡単に描いてやる。
「だからこいつを一辺に見立てて、こうやって面積で考えてみろよ。公式の意味分かっから」
「……あ！」

まぁこのへん、こうやって教えねぇ教官も、しょうもねぇんだけど。ただ公式並べて覚えろ覚えろ言うだけなら、授業要らねぇし。
ともかくそうやって、あれこれやって。一段落したとこで、かなりためらったけど、思い切って訊いてみた。

「おまえさ、平気か？」
「平気って……えっと、何が？」
訊くだけムダだったかもしんない、そう一瞬思う。
けど、このまま様子見ってのは、そろそろ限界ってヤツだろう。
被害が出てねぇってだけで、もう直接手を出す段階に移ってやがるし。

「あー、ほら、あいつら女子の――」
ルーフェイアがうつむいた。
「最初から……馴染めないと、思ってたから……」
最後のほうは言葉にならない。

学校へ行きたい。
友達がほしい。
こいつが望んでる、たったそれだけのことが壊れかけてんのに、なんもできねぇ自分に腹が立つ。

ホント言うとあのバカ女子どもに、こいつがいままでどこで何してどんな思いだったか、ぶちまけてやりたかった。
でも、ルーフェイアの場合はそれはぜったい、できねぇワケで。
万が一そのへんから、シュマーの話にたどり着いたらヤバすぎる。

かといって、ほかにどうしたらいいかも分かんねぇし。
ルーフェイアとシーモアがガチでやりあえばそれで終わる気もすっけど、シーモアはともかく、ルーフェイアのヤツはぜったいンなことしねぇだろう。

「――ゴメンな」
「ううん、イマドは、違うから……」
そう言うルーフェイアの瞳から、涙がこぼれる。

なのに俺は、どうしようもなく非力だった。

Ｅｐｉｓｏｄｅ：１１　苦悩

◇Ｒｕｆｅｉｒ

重い音を立てて、魔獣が倒れた。

ここは校舎がある場所ではなくて、隣のちいさな島だ。丸ごとぜんぶが魔獣を放った訓練施設になっていて、日に何度も連絡艇が往復している。

わざわざこんな場所まで来ているのは、校舎裏の訓練施設を使うのを、禁止されてしまったからだ。

ほんとうは校舎裏の施設も、低学年は使用禁止だ。でも訓練が出来ないと困るだろうと、学院長が例外で、あたしの使用を許可してくれた。

けどそこで、朝夕自主訓練を兼ねて魔獣を倒していたら、怒られた。根こそぎ狩ったらダメだそうだ。

ともかくそういう理由で、ここまで毎日、通うことになってしまった。

倒した魔獣がもう動かないのを確認して、息を吐く。

複雑な気分だった。

望んで来た学校は、楽しい。初めてのことで戸惑ってばっかりだけど、それも楽しかった。

でもまさか、こうやって戦っているときがいちばん、気楽でいられるようになるなんて。

馴染めない自分。

同じことができない自分。

ここはシエラでＭｅＳだけど、それでもみんなとの間に、深い溝があるのが分かる。

彼女たちは、実戦なんて知らない……。
それはいいことだと思う。けどそのことが、どうにもならない差になってた。
あたしにとっての当たり前。生きていくために必要だったこと。けどそれはどれも、みんなにとっては非日常で、想像を超えた世界だと思い知る。

いろいろ考えながらも、背後に忍び寄る気配に、ふたたび戦闘態勢に入る。音と気配と臭いが、どの魔獣かをあたしに告げる。
間合いを計りながら振り向いた先には、イソギンチャクを思わせる魔獣。
触手を振り上げ、一気に繰り出してくる。
身体を入れ替えてかわすと、鞭のようなそれは、近くの大きな石を突き砕いた。
この島に放されている魔獣は、さすがに強さが違う。

――でも。

十分に引きつけておいて、低位の雷撃魔法を放つ。
魔獣がひるんだところで、続けて火炎魔法。炎といっしょに突っ込んで、急所へ太刀を突き立てた。
同時に、太刀を媒介にして、魔獣の体内へ雷撃を放つ。
完全に動かなくなったのを確かめてから、あたしは魔獣から離れた。
大きく息を吐く。

やっぱり、ここへ来たことそのものが、間違いだったんだろうか？
最近はみんな、露骨にあたしのことを避けてる。こっちを見ながら、囁き交わしてるのもしょっちゅうだ。
中にはあからさまに言う子もいたし、持ち物に手を出そうとする

子もいる。
つまり……出て行け、と言いたいんだろう。
異質なものを、人は警戒する。
シュマーという一族の、総領家。代々傭兵をしてきた集団を、束ねる存在。
冷静になって考えてみれば、こんなものがふつう人たちのあいだで、馴染めるわけがない。
なのにそう分かっても、諦めきれない自分がいた。イマドがなぜかあっさり受け入れてくれて、だからもしかしたら他の人も、と思うのだ。
けどそれは、彼が例外なだけで……。

どうしたらいいのか、まったく分からなかった。
――バトルなら、考えなくても身体が動いて魔法を使えるのに。
自分が情けなくて、涙がこぼれる。
教室の中で、みんなといっしょにやっていきたい。ただそれだけのことさえ、あたしはまともに出来なかった。
母さんがなぜあたしを学校に行かせなかったか、やっと分かった気がする。

Episode：12

そのとき、アラームが鳴った。慌てて時計を見てみると、針が戻る時間を指している。
涙をぬぐってから、あたしは走り出した。少し奥まで来てるから、急がないと船に間に合わない。
魔獣をやり過ごしながら、船着場まで戻る。ちいさな詰め所の前に、人影があった。

「あぁ良かった、無事戻ってきたね」
「はい、遅くなってすみません」
ここの守衛さんだ。
「いつも時間より早く帰ってくるのに、今日は遅いから心配したよ」
続く言葉をいっかい飲み込んで、守衛さんがあたしの顔を覗き込んだ。

「――泣いてたのかい？」
「え？　あ、なんでも、ありません……」
恥ずかしくて下を向いたあたしに、守衛さんが声をかけた。
「こっちへおいで、お茶でも飲んでいきなさい」
言って、詰め所のドアを開ける。

「あの、船は……？」
心配になって尋ねる。船はちゃんと時刻表があって、定時に出さないといけないはずだ。
でもおじさんは、ちょっと笑って答えた。
「船ならね、いま故障中だよ。うん、さっき故障したんだ」
最後の便だから自分が朝来た船で帰るだけだし、と付け加えて、

おじさんはあたしを招き入れた。
お茶とクッキーとが出される。
「さ、遠慮しないで食べなさい」
「ありがとう、ございます……」
何かのハーブらしくて、カップからいい香りがしていた。
それを見るうち、なぜか涙が出てくる。

「学院で、何かあったのかい？」
聞かれたことに答えようとしたけど、よけい涙がこぼれただけだった。
何とか泣くのをやめようとして、必死に涙をぬぐうあたしに、おじさんが言う。
「学院長から聞いたよ、少年兵あがりだそうだね」
驚いて顔を上げると、おじさんの優しい表情があった。

「学院長とは、昔からの知り合いでね。きみがこっちで訓練するようになったから、と頼まれたんだよ。
まだ、学院は慣れないかい？」
また答えられなくて、下を向く。
けどおじさんはあたしの様子で、分かってしまったみたいだった。

「聞いた話じゃ、いろいろ言われてるみたいだね」
ほんとうは否定しなきゃいけないのかもだけど、できない。涙が次々あふれて、止まらなくなる。
「詳しく知っているわけじゃないから、的外れかもしれないが」
そこでいっかい言葉を切って、おじさんはそっと、あたしの頭を撫でた。
「きみはこの学院に、居ていいんだよ」
「――！」
その言葉を聞いた瞬間、あたしはいままで以上に泣き出してしま

った。こんなことで、こんなに泣くなんてと自分でも思うけど、止めることができない。
おじさんがそっと、あたしを抱き寄せた。
「辛かったら、いつでもここへ来なさい。のんびり休むくらいはできるし、お茶ならいくらでも出すよ」
暖かい、笑顔と言葉。
あたしがうなずくと、また頭を撫でられた。
「いい子だ。
さ、もう少ししたら本島へ戻ろう。遅くなりすぎたらいけないからね」
「はい」
少しだけ、元気をもらった気がした。

Ｅｐｉｓｏｄｅ：１３

◇Ｉｍａｄ

コトが起こってから、しばらく過ぎた。けど、状況が変わる気配はない。

鈍感なルーフェイアのヤツも、さすがにいろいろ分かってきて、参りはじめてた。なかでも聞こえよがしにゴチャゴチャ言われんのが、こたえてるっぽい。

――平気だったら、逆に怖えぇけど。

ただ細かいコト言うと、まだこいつ微妙にカンチガイしたままだ。自分が最前線にいたせいでいろいろズレてて、それが嫌がられてると思ってる。

まぁたしかに、ある意味で間違っちゃいねぇんだけど……。

ホントは教えたほうがいいのかもしんねぇけど、俺はそのまんまにしてた。説明しても通じねぇ気がしたし、何より分かったら、よけい落ち込みそうな気がする。

けどカンチガイとか関係ナシに、こいつそろそろ限界だろう。なんかあるたんびに前のこと思い出して、自分で傷口えぐるかっこうになってる。

そのせいか前にもまして食わねぇし、身体おかしくなんねぇうちに、マジで手打ったほうがよさそうだった。

「ルーフェイア、おまえホントに大丈夫か？」

「あ、うん。だいじょぶ」

口じゃそう言ってっけど、ここんとこ顔色もあんま良くない。

放課後の自習室で、俺とルーフェイアはだらだら、課題片付けてるとこだった。ほとんどの日はコイツさっさと自主訓練に行っちまうけど、週に一回か二回、苦手な数学を俺に教わりに来る。
けど課題より、やっぱコイツの身体のほうが心配だ。

「診療所行って、診てもらったほうがいいんじゃねぇか？」
「でも、病気じゃないし……」
すぐ泣くクセに、こーゆーとこは気丈っつーか、頑固っつーか。
当のルーフェイアのほうは、教科書をめくってる。

「えっと……このへん、なんだけど」
「おまえ、ほんっと数学苦手だな」
基礎的なとこはしっかりしてっけど、一段上がるとどうもこいつダメだ。

ただ、いわゆる「できない」のとは違う。どうにも数学は飲み込みが悪くて、分かるまでに時間がかかるだけってタイプだ。
だからちゃんと教えれば根本的なとこまで分かっけど、授業だけじゃ時間足んなくて、ついていくのがやっとだった。
戦闘なんかに才能ぜんぶ取られて、こっちに残らなかったんじゃないか、って気がする。

「何がわかんねぇんだ？」
「えぇと……あ、ここ。どうしてこれ……こう、なっちゃうの？」
「簡単だぞ？」
しばらくそんなやりとりが続く。
ってもルーフェイアのヤツだって、頭は悪くないわけで。ひと通り終わらせんのに、そんな時間はかかんなかった。

Episode：14

「一休みしようぜ」
「うん」
勉強道具を放り出して、おもいっきし伸びをする。
――あれ？
ルーフェイアの頭越し、入り口の扉のほうで、アーマルとヴィオレイのヤツが手招きしてた。
こっち来りゃ早えぇのに、そうもいかないらしい。

「悪りぃ、ちっと席外すわ」
「あ、うん」
ルーフェイアのヤツをあとに残して、悪友たちの方へ行く。
「なんだよ？」
「いや、そのさ……」
どっちも歯切れが悪い。言いよどんだままダンマリだ。

「用がねぇなら、帰っぞ？」
「待てってば」
もっかい顔を見合わせてから、ヴィオレイのほうが口を開く。
「――おまえさ、ルーちゃんとあんまりいっしょにいると、やばいと思うんだよ」
思わず吹き出した。
ある程度予想してたけど、ここまでパターンどおりだとバカすぎて笑うしかない。

「おい、笑い事じゃないぜ？　女子の連中、メチャクチャ言ってるぞ」
「俺がルーフェイアと寝たとでも？」

悪友二人が石化する。
「い、いや、そこまでは……」
もうちっとなんか言われっかと思ったけど、意外と女子は気が小さいらしい。

「だったら別に、どうってことねえだろ。ほかにねぇなら、俺戻るわ」
「おい、ちょっと待てよ」
こいつらが呼びとめた。
「なんだよ？」
「……あのさ、おまえどうして、そんなにアイツの味方すんだ？」
「いや、それはルーちゃんが可愛いから」
よく分からない茶々を入れた、ヴィオレイのヤツを殴りつけながら、ちっと考える。
こいつら口が堅いし、話が分かれば味方になるかもしんない。

「誰にも言わないって、約束できっか？」
「へ？　まぁ、おまえがそこまで言うなら、約束するぜ。なぁ？」
「当たり前じゃないか」
なんかひとり微妙にズレてる気がすっけど、ともかくこいつらが同意した。
で、一呼吸置いて。

「あいつ、戦場育ちなんだよ」
「戦場？　戦争孤児ってやつか？」
さすがに予想の範囲超えてたらしくて、こいつらが的を外したことを返す。
「そんなカワイイもんじゃねぇって。
――あいつ少年兵あがりで、ここ来るまえは最前線にいたんだよ」
二人が呆然とする。

Episode：15

「ちょっとマテ、だってあいつ、俺らと同い年だろ？」
「あの可愛くて優しいルーちゃんが、そんな、そんなの……」
言いたいことは分かる。黙って座ってたらルーフェイアのヤツ、誰がどう見ても、おとなしいお嬢さんだ。太刀振るって人を殺せるとか、思いつくヤツのほうがおかしいだろう。

「３つの頃から戦地にいて、５歳の頃にはもう、伝令とかやってたらしい。
ここ来る直前とか、ホンキで最前線にいたしな」
「マジかよ……」
重苦しい沈黙。
いくらＭｅＳのＡクラスったって実戦経験のあるヤツなんて、ましてやこの年じゃ、いるわけない。
その中に混ざる、「殺す」プロ。異質なんてもんじゃなかった。

「じゃぁ、ルーちゃんが本校へ、直接入学したのって……」
「ああ」
悪友たちが顔を見合わせる。
「少年兵あがりじゃ、分校とかじゃハナシにならんよな」
「ルーちゃん……気の毒すぎるよ」

話の流れから、部屋の奥でぼけっとしてるあいつに視線が集まると、それを感じたらしい。ルーフェイアのヤツが顔を上げた。
何か思うとこがあったらしくて、ふわりと立ってこっちへ来る。
金糸の髪。碧玉の瞳。白磁の肌。
――妖精のような雰囲気の、華奢な美少女。
その手が血に染まってるとか、まったく信じらんねぇ。

「……？」
俺らの注目あびて、ルーフェイアが不思議そうに首をかしげた。
「えっと……どうしたの？」
「――あのさ、戦場にいたってホントなのか？」
「このバカっ！」

とっさに口ふさいだけど、間に合わない。
ルーフェイアの顔が曇った。
「……話しちゃった……の？」
寂しげな瞳。
なんかどきっとする。

「――すまねぇ」
「いや、俺らが聞いたんだし。イマドがわざと言ったとかじゃないから」
「ゼッタイ喋らないって」
口々に言う俺らに、ルーフェイアのヤツが儚い微笑みを向けた。
その瞳には、涙。

（おい、ちょっといいか？）
悪友2人にささやいて、俺はルーフェイアから少し離れた。状況が状況だから、こいつらもすぐ分かって、目配せしあってこっちへ来る。
「――あの通り、あいつもう、ボロボロなんだよ。だから……お前ら、頼むわ」
「分かったよ」
悪友二人がうなずいた。

Episode：16

◇Ｎａｔｉｅｓｓ

あのお嬢さん、思ってたほどヤワじゃなかったみたい。まだ授業とか、ふつうに来てる。

「もっと早く、ネ上げると思ったんだけど」

「イマドがいるからじゃない？」

休み時間に、みんなでいつものおしゃべり。

「あの子って案外、あれで隙がないしね」

「あー、それたしかにそうかも」

ルーフェイアって子、意外だけどすっごい用心深い。前に誰かが持ち物隠そうとしたけど、防御結界張ってあって手が出なかったって言ってた。

そばを通るときに、転ばせようとかする子もけっこういるんだけど、一人も成功してないし。

「なんだろね、あの子。いわゆるお嬢様とは、ちょっと違うっぽいよね」

「そりゃまぁ、曲がりなりにもシエラの本校で、Ａクラスになるくらいだし……」

あの子、思ってたよりずっと頭良かった。理系はちょっと苦手っぽいけど、それだって十分トップクラス。得意な科目とか、まるで辞書か教科書だし。

「とゆかさ、あの実技、お嬢様にしちゃおかしくない？」

「うん……」

みんなが顔を見合わせる。

ルーフェイアって頭もたしかにいいんだけど、それ以上に実技が

すごいの、だんだん分かってきた。
それも剣技とかだけじゃなくて、待ち伏せとかかく乱とか、そういう実戦系まで強くて。けどこんなの、習えるもんじゃない。

「どっか、ほかのＭｅＳにいたとか」
「あ、それはアリかも」
「でもそれでも、やっぱりおかしいよ」

他のＭｅＳからの転校は、ときどきある話。理由はいろいろで、もっと箔を付けたいなんてこともあるし、ふつうのＭｅＳじゃレベルが低すぎて話にならないから、なんてこともあるし。
ただそうだとしても、こういう実技も含めていちばんカリキュラムの進度が早いのが、このシエラ本校だったり。
そこでついていくどころか、余裕でこなしちゃうとか、ちょっとあり得ない。

「なんだろね……」
みんなで頭ひねってみるけど、答えなんてわかんなかった。
「でも、あの持ち物とか、お嬢様だよね」
「だよねぇ」
「どっちしたって、図々しすぎだし」

けっきょくここへ話は戻ったり。
そこへとつぜん、きゃらきゃらした声が割って入った。

「ねー、ホントにまだみんな、こんなコト続けんの？」
視線がいっせいに集まる。
「こういうの、本校に入れないおバカさんが、やるんだと思ってた〜」

オレンジがかったふわふわの髪に、薄い水色の瞳。ルーフェイアほどじゃないけど、でもかなり小柄。けど見かけに反して、言うことやること何でも強烈。
ミルだった。

「あんた、何が言いたいんだい」
「べっつにー」
図太いのか鈍いのか、シーモアの鋭い視線にもぜんぜん平気。
「たださ、頭の良し悪しと、やる内容って関係ないんだなーって。ちょっと感心しちゃった」
「――！」

周り中が殺気立つなか、それでもミルったらけろっとしてるし。
「でもさぁ、こーゆーのって、シーモアらしくないよねー。めっずらしー。
あ、もしかしてアレ？　イマドがルーフェイアと、仲良しなっちゃったから？」

Episode：17

このあとの惨劇予想しちゃって、一瞬みんなが凍りついたり。
ミルの言ってること……的外れ、ってワケじゃない。けどそれヌキにしたって、ルーフェイアって子、空気読まないし。
まぁその点じゃ、ミルはもっと空気読まないんだけど。

「あんた、痛い目でもみたいのかい？」
ゆら、とシーモアが立ち上がって、あたしたち思わず後ろへ下がる。
「んー、見たくはないけどー。でもシーモア、ホントにいいの？痛い目、どっち見るかわかんないよ？
てか、いまやったら退学かもね。あたしはそれでもヘーキだけど」
「……」

シーモアが動けなくなる。
この学院、校内の暴力沙汰は全面禁止で、ヘタしたら退学処分。なにしろＭｅＳだから、もし起こったら死者でるかもだし。

でもこれ、あたしたちにとってはキツすぎ。ここ追い出されたら行くとこないし、なによりシーモア、辞められないワケがあるもの。
いっぽうでミルは、退学とか平気。彼女ったらケンディクに片親だけどちゃんといる、この学院じゃ超少数派の家族持ちだから。
きっとそれ分かってて、言ってるんだと思う。

もちろんシエラでこんなこと言ったら、徹底無視で当たり前。だけどミル、そんなのされても一切気にしない子だし。
だからいろんな意味で、いちばんやりづらい相手だったり。

「まぁいいや、どうせやめないでしょ。
けどさ、あたし巻き込まないでね。そゆの楽しくなさげだもん」
いったん言葉切って、ミルったら不敵な微笑。
「それに万一どっかのＭｅＳ上がりとか、少年兵あがりだったら、あたし知〜らない」
そう言い置いて彼女、ひらひら教室出てった。

「あいつ……！」
飛び出して追いかけそうなシーモアを、慌てて止める。
「ミルの言うことなんて、気にしちゃダメだよ」
けど、みんなからの同意はなくて。
ミルが言ったことが、みんなのあいだにじわっと、広がったみたい。さっきとは違う感じで、顔を見合わせたりしてる。

シーモアが見回したら、みんなバツが悪そうに視線をそらした。
気まずい沈黙。
けどそのときアラームが鳴って、シーモアがポケットから通話石を取り出した。

「シーモア、もしかして倉庫の点検係り？」
「ああ。今日あったの忘れてたよ。行ってくる」
足早に教室を出てく彼女を、みんなで見送る。

「けどさ……ルーフェイアっていつも黙ってて、変わってるよね」
しばらくして、誰かが言った。
「言いたいことあるなら、はっきり言えばいいのにね」
「そうだよね、黙ってたら分かんないもの」
「でも、イマドたちといるときは、話してるっぽいよ？」
飛び交ううわさ話。

「やっぱり、なんかヘンな子だよね」
「それはぜったい言えてる」
「あんまりかかわらないほうが、いいっぽいよね……」
話の落ち着き場所は、だいたいあたしも同感。あの子ったら、得体が知れなすぎだもの。

「シーモアはちょっと行き過ぎかもだけど、でもあの子だって悪いよね。もっと何か、話したりすればいいんだから」
「だよねぇ」
みんな、うんうんとうなずく。
「何かするのはアレだとしてもさ、やっぱりあんまり、近づかないほうがいいよ」
ちょっと後ろめたい目配せをお互いにしながら、そんなとこで話がまとまった。

Episode：18　転機

◇Ｒｕｆｅｉｒ

状況は、相変わらずだった。

――ムリなの、かな。

イマドやロア先輩、訓練島のおじさんに、励ましてもらって頑張ってきたけど、自信がないなんてもんじゃない。

そんなことを考えたら涙がこぼれそうになって、くちびるを噛んだ。さすがに教室で泣きたくはない。

と、影が差す。

恥ずかしくて目をこするフリをして、それから顔を上げた。

オレンジがかったふわふわの髪。薄い水色の瞳。同じクラスの子だ。

「だいじょぶ？」

屈託のない笑顔。

「話すの初めてだね。あたしね、ミル。ミルドレッド＝セルシェ＝マクファディ。んーと、ルーフェイアって長いから、ルーフェって呼んじゃっていい？」

一気にまくしたてる。明るい声だった。

「ねぇねぇこれからお昼でしょ？　今日もイマドたちといっしょ？あたしも入れてね」

夏の日差しにきらめく、海みたいな子だ。

「さ、早く行こ。好きなのなくなっちゃったらヤだし。

イマドイマド、行くよー！」

よく通る声で呼ばれて、イマドたちが振り向いた。

「げ、ミル、なんでてめぇが湧いてるんだ」

「べつにいいじゃん、なんとなくだし」
やり取りについていけなくて呆然としてたら、ミルに腕を引っ張られて、そのまま廊下へ出て歩く。
けどしばらく行った場所で、ミルがとつぜん、立ち止まって言った。

「ルーフェ、あのさ、だいじょぶ？」
聞き返さなくても何のことか分かって、だからあたしは下を向く。
だいじょうぶと答えたい。でも……そう言えない。
「そっか。そだよね。だいじょぶなワケないよね」

イマドたちが、追いついてくる。
「何やってんだ？」
ミルが、イマドたちのほうに、いたずらっぽい瞳を向けた。
「男が三人もくっついてて、なーんもできなすぎー」
「っ……！」
彼らの顔色が変わる。

「あっは、やっぱ図星？　そだよねー、ルーフェかわいいしー」
「てめぇ、何しにきやがった」
イマドの表情が一気に冷たくなる。
でも、ミルはまったく動じなかった。

「ほんとはさー、放置してよっかなーって。メンドイし。
けど、ルーフェなんかすっごいワケありっぽいし、シーモアもちょーっと暴走気味だし」
言って、一呼吸。彼女がなんとも言えない、底知れない微笑を浮かべる。
「だから、イタズラしよっかなって」

「え？」

Episode：19

何のことか分からなくて、考え込むあたしの横で、イマドが怒鳴りつけた。
「てめぇ、タダでさえややこしくなってんのに、これ以上引っかき回したら容赦しねぇぞ！」
すごい剣幕だ。
「きゃー、イマド怒った怒った～」
それでもミルはお構いなしで、楽しそうに笑ってる。

「イマド、わっかりやすすぎー。ルーフェにぞっこん？
ま、イタズラっても、ただの実験だからー。どうせいまより、悪くなんてならないし」
「そりゃたしかに、そうだけどさ……」
イマドたちが顔を見合わせた。

「つか、何する気だ」
「き・り・く・ず・し」
「切り崩し？」
何のことか分からない。そもそも、切り崩すようなものなんてまわりに見当たらない。

「――ルーフェ、もしかして、話見えてない？」
「ごめん……」
物分りの悪さが申しわけなくて謝ると、ミルがイマドたちのほうへ顔を向けた。

「三人もいて、だーれも状況説明してないんだ？」
「いや、だってこいつ、気づいてねぇし」

「ホントのこと分かったら、よけいかわいそうだよ」
口々に言いわけするのを聞いて、ミルが言い放つ。
「ばっかじゃないの！」
さっきまでの楽しそうな雰囲気とは一転、厳しい声と視線だ。
「何がどうなってるか分かんなかったら、ルーフェだってやりようないじゃない。
分かんないのもアレだけど、教えないってもっとヒドいでしょ。共犯みたいなもんだよ！」
ほとばしるような怒りかただった。
そしてこんどは、優しい表情であたしのほうへ向き直る。
「ルーフェ、いい？　あのね、ルーフェはいじめられてるの。分かる？」
「いじめ……？」
言われてることがピンと来なかった。
「ふだんいろいろ言われたり、やられたりしてるでしょ？　それ、全部そうだよ」
「え、でも、あれは……」
あれはあたしが違いすぎて、馴染めないせいだ。
肝心なことはひとつも知らなくて、できることと言えば……。
「あ、泣かした」
「あれ、泣いちゃった」
下を向いたあたしを、ミルがしゃがみこんで見上げた。
「ルーフェ、だからね、ルーフェは悪くないの。それ分かる？」

「え？」
驚いて彼女を見返す。
くるくるっととした水色の瞳が、笑った。

Episode：20

「ルーフェがね、ふつうとはちょっと違うのは、たしかだけどさ。でも、それといじめは別だよ。いっしょに考えたらダメだよ」
「そう、なの……？」
「そだよ」
ひょいっと彼女が立ち上がる。

「違う違うって言うけどさぁ、同じ人なんて、ぜったいいないじゃん。みーんなどっか違うもん。なのに比べるとか、あたし分かんないなー」
はっとした。たしかにミルの言うとおりだ。
何もかもすべて同じ人は、どこにも居ない。

「ちょっと、分かった？」
「……うん」
少しだけ、楽になった気がした。
「よーし、そしたらイタズラいこー！」
彼女はどこまでも楽しそうだ。

そのようすに呆れ顔で、イマドの友だちが突っ込んだ。
「もしかして、ルーちゃんのためってより、単に面白そうだからって言わないか？」
「うん」
きっぱりとミルがうなずく。

「でもさ、悪くない話だと思うんだ～。
あたしは楽しめちゃうし、上手く行けば片付くし。サイアクでも、現状維持ってだけだし」

彼女の魔を秘めた笑顔。
「イマドたちも利用できるものは、利用したほうがいいんじゃない？」
「……」
三人とも言い返せないみたいで、そのまま黙る。
「じゃぁそしたら、次の授業からやってみよっかー」
次の授業っていったら、午後の実技だ。内容はたしか、自衛のための格闘技。
「なにを……するの？」
「んー、要するにこういうのって、勢力図がが変わればいいんだよね」
ミルがちょっと考え込みながら言う。「どう説明すればいいか」を考えてるみたいだ。
「えーっとだからね……こういうのって誰か、中心になってるのがいるでしょ？」
イマドたちがうなずいた。あたしは気づかなかったけど、みんな分かってたらしい。
「じゃぁさ、どうしてこういうふつうじゃダメなこと、やれちゃうか分かる？」
「本人が、そういう性格だからじゃ？」
ヴィオレイの答えに、ミルは首を振った。
「それもあるけどね、それだけじゃできないよ。ひとりでやってたら、その人のほうが“おかしい人”になっちゃうから」
「――そういうことか！」
納得がいった顔で、イマドが声を上げる。

「けど、どうやるつもりだ？　切り崩すったって、ちょっとやそっとじゃできねぇだろ」
「女子はねー。でもさ、今回って男子は日和見だから～」
「そりゃそうだけどよ、だからってすぐ、どうにかなるもんじゃねぇぞ？」
二人の話に、ついていけない。

「あのな……オマイら二人、何の話してんだ？」
イマドの友だちがそう言って、ちょっとほっとする。分からなかったのは、あたしだけじゃなかったみたいだ。
「えー、こんなに説明してんのにー？」
「してないしてない」
たいへんな話のはずなのに、なんだか笑ってしまうようなやり取り。

「だからね、切り崩す話なんだってば～」
ミルは自信満々だけど、あたしたちは顔を見合わせるばかりだった。
「ワケわかんね……」
「というか、ミルの言うことだから、最初から理解とか無理だってば」
ひどい言われようだ。
だけどこれがふつうなんだろうか？　イマドは当たり前って顔をしてるし、ミルのほうは完全受け流しだ。

――彼女、強いな。
そう思った。周りを気にしないで、自分のスタイルを貫けてる。
「ともかくさー、やってみようよ？　おもしろそうだし。
それにもう、毒流してきちゃったーし。上手くいったらいまごろ、

仲間割れかも？」
楽しそうに、くすくすと笑うミル。
「――しゃぁねーな。ほかに選択肢、いまんとこねぇし。やるだけやってみっか」
「そだな。このまま何もしないじゃ、ルーちゃんいつまでもこのままだし」
みんなの意見がだいたい一致した。

「じゃぁ決まりね！
そしたらさっきも言ったけど、次の授業からやってみよ！」
「だからさっきも聞いたけど、何すんだよ」
「んー、わかんなーい。でもそのときになったら、ヒラメくと思うんだ。ともかくお昼お昼！」
ミルの言うことはなんだかいい加減で、ちょっと不安な気はする。
でも、何かが少しだけ動くかもしれない、そんな感じがした。

Episode：21

◇Ｎａｔｔｉｅｓｓ

授業の終わりまでもう少し。早く早くと思いながら、つまんない型の練習を続ける。

たしかにこれが基本なのは分かるんだけど……もう少しなんか、違うことしたいもの。

「よし、じゃぁ次は……」

「せんせー！」

とつぜん、ミルが突き刺すような声で手を挙げた。きっとまた何かとんでもないこと言って、授業かき回すのかも。

でもそうすれば時間潰れるから、これはちょっと歓迎？

「ミルドレッド、きちんと授業を受けないと減点するぞ」

「えー、でもあと時間ちょっとだしー。たまにはルーフェイアとイマドの模擬試合とか、そーゆーの見たいですー」

意外だけどこの言葉に、教官ったら考え込んだ。

「あの二人か……たしかにそれは、見ておいていいかもしれないな」

なんか、すごいセリフ。

イマドが強いのは、みんな知ってる。首席はダテじゃなくて、彼相手じゃ誰も攻撃当てられないの。

でも教官の言い方だと、ルーフェイアとならちゃんと試合が成り立つみたい。

「よし、二人とも前へ」

「え、マジっすか……」

しかも、イマドったらしり込み。いつだって誰が相手でも平然と

してるのに、こんなの初めて。

「いいから黙って前へ来い。ルーフェイア、きみもだ」

「はい」

彼女も立ち上がる。

学年でもいちばん大柄なイマドと、いちばん小柄なルーフェイア。頭ひとつ以上身長が違うの。

これで試合になるのかな……？

さすがにちょっと心配になる。いくらなんでも、体格差がありすぎだもの。でも教官がまさか、そこまでメチャクチャしないと思うし。

「……手加減しろよな。さすがに怪我したくねーから」

「あ、うん」

とんでもない会話に、なんか呆然としちゃったり。だって「手加減しろ」って、つまりルーフェイアのほうが、圧倒的に強いってことだもの。

けど、どう見たって、そんなふうには見えないし。

教官に促されて、二人が向かい合う。武器はどうするのかと思ってたら、練習用の杖が渡された。どっちも剣を使うからなんだろう。

「始め！」

短くて鋭い声と同時に、ルーフェイアが動いた。同時に、イマドも。

一瞬で間合いを詰めたルーフェイアの突きを、イマドがすんでのところでかわす。同時に動いてなかったら、きっと食らってたはず。

どうにか逃げたイマドに対して、ルーフェイアがそのままの体制

から即座に、手元側での返し突き。
硬い音がして、杖がぶつかり合った。イマドが下段から、ルーフェイアの杖を跳ね上げて防いでる。
でもルーフェイアは動じた感じもなくて、逆らわずに杖を操って、きれいに正眼に構えなおした。

Episode：22

間をおかず、ルーフェイアの攻撃。突いて、返して、薙いで、変幻自在ってこのこと。
イマドは防戦一方だ。けど、防げるだけでもすごい。ふつうならこんなの、ものの数秒で負けて終わりそうだもの。
みんな文字通り、息を呑んで二人を見守る。

またルーフェイアの攻撃。打ち下ろしてきたのをイマドが、横にした杖で受け止める。
瞬間、彼女が懐にもぐりこみながら、イマドの杖を支点にして、自分のを反転させた。
みぞおちへの返し突きを、イマドは避けきれない。

「そこまで！」
教官の声と目にしたものに、みんないっせいにどよめいた。
ルーフェイアの強烈な突きは、寸止め。イマドは怪我してない。

圧倒、なんてもんじゃなかった。正真正銘の桁違い。これじゃ上級生どころか、傭兵隊の先輩たちともやりあえる。
こんな子を、もし怒らせたら。そう思うと、背筋がちょっと凍りそう。

「強すぎ……だよね、あれ」
「ちょっと怖いかも」
ほかの女子も同じこと思ったみたいで、あたしのそばで囁きだす。
「あたしもう、あの子に何かするのはやめる。キレたら殺されそうだもん」

「おとなしいから、それはないと思うけど……」
「でもおとなしい子のほうが、キレたらヤバくない？」

これが決定打だった。ただでさえミルの言った、「ＭｅＳ上がりとか少年兵あがりかも」って話で、みんな浮き足立ってたわけで。そこへこんなもの見せられたら、とてもじゃないけど手出しなんてムリ。

「おまえなぁ、もっと手加減しろよ。危ねぇだろ」
イマドはなんでか知らないけど、ルーフェイアの強さには慣れっこみたいで、なんか突っ込みいれてるし。
「ごめん……」

また謝るルーフェイアのところへ、とつぜんミルが乱入した。
「ルーフェやっぱりすごい～！　ねね、こんどあたしにも教えて。いいでしょ」
「え……」
ルーフェイアはいつもどおり、黙ったまんま困った顔。ホントに話さない子。

「待てミル、ルーちゃんに教わるのは、この僕が先だから」
「えー、ずるーい！　あ、じゃぁいっしょならいいよ」
「なんだそれは。僕は一回も、いっしょなんて言った覚えはないぞ」

なんかぎゃぁぎゃぁ、周りのほうが騒ぎだす。
そこへ、ほかの男子が声をかけた。

「おまえらさ、そこで教官、頭から湯気出してるぜ？　最後の挨拶くらいしろって」
「最後の挨拶って、まだ時間きてねーぞ？」

やり取り見て、何かが動いたかも……って気がした。何がって言われると上手く答えられないけど、ともかくいままでと違くなったのは確か。

急に心配になって、シーモアを見る。こんなの見せられたら、冷静じゃいられないと思うから。

けど彼女、黙って自分の荷物持って、教室のほうへ向かって。

「シーモア！」

慌てて追いかける。

シーモアは、振り向きもしなかった。

Episode：23

◇Ｉｍａｄ

クラスの雰囲気はかなり変わった。

恐れをなしたんだろう、女子どもはルーフェイアに悪さすんのをピタっとやめてる。

細かいこと言うならこれもヤベぇんだろうけど、とりあえずいろいろ言われなくなっただけ、ルーフェイアの顔色も良くなってた。

あとすげぇのが、ミルだ。あの独特のノリでルーフェイアのヤツにまとわりついて、完璧な防波堤と化してる。学内のブラックリストにゃ片っ端から載ってるような、とんでもねぇ災厄娘だけど、今回ばっかは感心するっきゃなかった。

男子のほうは、だいたい元通りだ。俺ら仲介にする格好で、ルーフェイアはそれなりにやれてる。

いちばん気になるシーモアのやつは、だんまりだった。あれ以来クラスの女子と微妙に距離が出来てんのもあってか、目立った動きはゼロだ。ただ諦めたとか納得したふうじゃねぇから、まだひと悶着ありそうな気がする。

ただとりあえずは、平穏ってとこだろう。

「ルーちゃん、つぎは教室移動だよ。ここで用意しちゃダメだよ」

「え？　あ！」

ヴィオレイのまとわりつき、かなり激しい。けどルーフェイアは、誰かが面倒みねぇとどうもダメだから、あんま問題になってなかった。

「あれ、えっと……あと何……？」

それにしたってコイツ、バトルだとあんな冴えてんのに、ふだんの生活はボケ過ぎだ。
「工具だ工具、キット取って来い」
慌ててルーフェイアのヤツが、教室の後ろへ向かう。
途中で女子どもの脇を通ったけど、どうってことなかった。すんなり奥まで行って戻ってくる。
――けど。
通りすがり、シーモアのところで一瞬、ルーフェイアが立ち止まる。
「なんか言われたのか？」
「ううん」
気になって、戻ってきたコイツに訊いてみたけど、答えはＮＯだった。どう見てもなんか言われてきたっぽいのに、それ言わないってのは、要するになんかヤバいんだろう。
「ならいいけどな。行くぞ」
「うん」
知らん顔して立ち上がる。
こいつ、こういうことは頑として言わない。迷惑かけるのがイヤとかなんとかで、なんだって自分でどうにかしようとしやがる。
でも、ともかくなんか起こるのは間違いなさげだから、気をつけながら様子見ってセンだろう。
――アーマルとヴィオレイにも言っとくか。
あるとしたら、授業終わってからってのは確実だ。さすがのシーモアのヤツも、授業中にやらかすほど、ムチャクチャじゃねぇし。
だったら念のためでも、手が多いほうがいいだろう。
授業だのの合間狙って、あの二人に伝える。

「それってさ、なんかする気満々ってことじゃ？」
「でもよ、アイツ罠とかキライじゃん」
「シーモアのことだから、サシで勝負じゃねぇか？　あいつ性格、直球だかんな」
「あー、それアリかもな」
そんな話してたら、教官に呼ばれてたルーフェイアのヤツが戻ってきた。

Episode：24

「どうか……したの？」
「してねぇしてねぇ。それよかおまえ、今日も訓練島行くのか？」
はぐらかして、違うほうへ話を持ってく。
ルーフェイアは人を疑わない――よくこれで前線にいられたな――から、それ以上突っ込んでもこないで、俺の話に乗った。

「うん。裏の施設……怒られちゃうし」
「倒しすぎで怒られて使用禁止とか、メチャクチャだろ」
つかこんな理由、聞いたことねぇし。
「またすぐ行くのか？」
「じゃないと……暗く、なるから」

授業終わってすぐ訓練に行くってなら、シーモア絡みの話は戻ってからってことになる。ウソついてる可能性もゼロじゃねぇけど、こいつの場合すぐ顔に出るから、今回はナシだろう。
「そか、なら早く行ってこいよ」
「うん」
ぱたぱた、ルーフェイアのヤツが出てく。

「ルーちゃん行かせちゃって、だいじょぶなのか？」
「戻ってきたとこ押さえりゃ、どうにかなるだろ」
今から行ったとして、戻るのに使えそうな船は、二つか三つだ。
「んじゃその前に、イロイロやっちまおうぜ」
これにはみんな異論なしだった。

シエラじゃ放課後もけっこう忙しい。食事は出してもらえっけど、あとはぜんぶ自分でだ。いちおう洗濯も頼めるけど、たまになくな

るし、なんせ扱いが荒い。だから俺らくらいになると、自分でやるヤツが多くて順番待ちだった。
ほかにも予習復習しとかないとヤバいし、自主訓練サボるとおもいっきり落ちこぼれる。
まぁ今日はさすがに、休まねぇとムリっぽいけど……。

「オレ、教官に『三人で自主練』って言ってくるわ。んで休むって」
「頼むー。んじゃその間に僕は洗濯、当番だからやっとく」
何日かに一回しか自分の割り当てがねぇから、こういうのは何人かが集まって当番決めて、まとめてやるのが普通だ。

「イマド、先輩とリティのぶんもあるんだよね？」
「あるだろな。俺も寮戻るわ」
たぶんいつもの場所に、ひとまとめに出してるはずだ。それにもうひとつ、ほっとけねぇモンがある。
戻って部屋のドアを開けっと、ちっちゃい女の子が奥から飛び出してきた。

Episode：25

「イマドおにいちゃん、おかえりー！」
「ただいま、リティーナ。いい子にしてたか？」
「うん！」
同室の先輩の妹だ。

この子はまだ五歳だから、シエラには入学できない。けど先輩のほうは、もともと他所のＭｅＳに行ってたのもあって、シエラに入学しちまった。だからリティーナはひとり、孤児院に預けられたワケなんだけど……泣いてばっかで何も食わなくて、たちまち痩せちまったらしい。
で、それじゃ命に関わるって話になって、特例で寮でいっしょに暮らしてる。
先輩と昼飯食ったあと、リティーナはいつも部屋に一人だから、一回戻って様子見んのが俺の日課だった。

「勉強、終わったのか？」
「終わったよ、ほら、見てこれ！」
答えを書き終わったプリントを何枚も、誇らしげに見せる。
このまま兄貴といっしょにいるには、シエラの本校に入学しなきゃなんない。けどそれ、かなり難関だったりする。
だからいま、リティーナは猛勉強中だ。兄貴と離れたくない一心で頑張ってる。

「あとで丸つけしてやっからな。ん？　洗濯物どこだ？」
「これー！」
洗濯物の塊になって、リティーナが出てきた。ぜんぶ抱えてきたらしい。

「危ねぇぞ。ほら貸せ」
「はーい」
ぜんぶ持ってやって、チビ連れて洗濯場まで行く。
「悪りぃ、ヴィオレイ、こんだけ頼むわ」
「ほーい。リティーナ偉いね、お手伝い？　イマドにいじめられてない？」
リティーナは寮じゃけっこう人気者だ。可愛がられる性格だし、ここじゃ弟妹失くしたヤツも多いから、どこへ行ってもかまわれる。
「イマドお兄ちゃんが、そんなことするわけないもん！」
「そっかー、なら良かった」
他愛ない話しながら、洗濯物を突っ込んでく。
「ねぇお兄ちゃん、リティーナお腹すいた！」
チビがこう言い出したら、食わせるまで黙らない。
「まだ、おやつ食ってねぇもんな。食堂行くか？」
「やだ！　お兄ちゃんのパンケーキがいい！」
こいつわりとワガママだ。
「いいだろ、食堂ので。ケーキとかうまいぞ」
「や、だ！　お兄ちゃんのほうがおいしいの！」
向こうは本職なんだから、ンなわけねぇんだけど、こう言われちまうとダメとも言えない。
「しゃぁねぇな……今日あんま時間ねぇから、少しだけだぞ」
押し切られて、部屋から材料持ち出して、調理室まで行く。
「はやく焼けないかな～」
「触んじゃねぇぞ、熱いから」
フライパン覗き込もうとするリティーナを引き離しながら、手早く焼いて出してやった。

ふぅふぅと冷ましながらコイツが、さっそくほおばる。
「おいしーい！」
こういう顔されると、まんざらでもない。

「悪りぃけどあんま時間ねぇから、早めに食えよ」
「うん」
言われてしばらくの間、黙って食ってたリティーナが、とつぜん口を開いた。
「イマドお兄ちゃんって、あのきれいなおねえちゃんと、ケッコンするの？」
真顔で訊かれて思わずむせる。

Episode：26

「なんでいきなりそうなるんだ！」
「だって。あのおねえちゃんといると、たのしそうだもん。コイビトでしょ？」
とんでもないガキだ。
「だから、別にそういうワケじゃなくてな……」
「うそだー」

きゃっきゃっと騒ぎながら、空になった皿を持ってリティーナが駆けてく。
そのリティーナが、窓の外を見ながら立ち止まった。
「あ、きれいなおねえちゃんだ」
「え？」
コイツがそう呼ぶのは、ルーフェイアだけだ。

「どこだ？」
「ほら、あそこー！」
ちいさな手で指差すほうを見ると、たしかにあの金髪姿があった。
思ってた時間より、だいぶ早い。
どっちにしてもこれから、シーモアのヤツと会う可能性が高かった。

「リティーナ悪りぃ、アーマルとヴィオレイ来たら、俺がルーフェイアのとこ行ったってくれ」
「ルーフェイア……？」
「『きれいなおねえちゃん』のことだ」
「あ、うん、わかった！」
リティーナに伝言頼んで、部屋を飛び出す。

たしか奥のほうへ行ったから、考えられる場所ってぇと……。
だいたいの見当つけて向かうと、ナティエスの姿が視界に飛び込んできた。
けど、ルーフェイアとシーモアはいない。校舎から出てくる間に、どっか移動されちまったっぽい。

「おい、ナティエス！　ルーフェイアとシーモアどこだ」
「あれ、イマド？」
危機感ゼロの表情だ。
「どこだって訊いてんだよ」
「それ、あたしもよく訊いてなくて。でも、たしか“秘密の場所”って」
その一言で場所が分かった。

「あそこ行ったのか。ナティエス、行くぞ」
「はーい、ミルちゃんも行きまーす」
予想もしなかった声がとつぜん聞こえて、頭っから冷水ぶっ掛けられた気分になる。
「ミル……てめぇどっから湧いた」
「んー、どこだろー？」
会話が成り立たねぇし。

「あれ、行かないのー？」
「おまえも来んのかよ……」
「うん♪」
行く場所はもともと安全とはいえねぇけど、最悪の場所にランクアップした気がしてくる。
「てかさ、二人とも、準備だいじょぶー？　なんか危険な魔獣が来

ちゃったからって、訓練施設ってば閉鎖だよ？
そこ行くんだから、用意はちゃんとしないとねー」
ミルがすげー楽しそうに、さらっと言った物騒な話に、思わずナティエスと顔を見合わせる。

「ナティエス、おまえ、武器ちゃんとあるな？」
「うん。イマドも平気？」
「ああ」
互いにうなずいてから俺ら二人＋一人、その“秘密の場所”へ続く道へ、足を踏み入れた。

Episode：27　真相

◇Ｒｕｆｅｉｒ

時間を気にしながら、校舎の裏手、敷地のいちばん奥へと走る。じっさいは間に合ってるのだけど……それでもなんとなく、急ぎたかった。

さっき授業の前、シーモアが初めてあたしに話しかけてきた。時間と場所を指定してきて、「そこで待ってる」と。

理由は分からない。ただ、彼女が何か真剣なことだけは分かった。だから、早めに行きたい。

着いてみるともう、炎のような髪をした彼女が居た。

「思ってたより早く来たね」

何を言ったらいいのか分からなくて、ただうなずく。

「こっちだ」

シーモアがうながして、塀のほうへ向かった。

「これ……」

「そうさ」

茂みをかき分けた奥に、子どもが1人やっと通れるくらいの穴があった。

そこへ、彼女が入っていく。慌ててあとへ続くと、シーモアは訓練所の中を、さっさと歩き出してた。

どこへ行くのか訊きたかったけど、厳しい表情に圧されて、訊くことができない。

そのまま岩の隙間を通り、崖の足場を降りて、最後に洞窟のあるちいさな海岸へたどり着く。

「ここなら、見回りも来ないからね」
たしかにそうかもしれない、と思った。
入り組んだ地形と、隙間を抜けてきた岩のせいで、この砂浜は完全な死角だ。

――けど、何のために？
それになにより、この気配……。
不思議に思っていると、シーモアのほうから切り出した。
「あんた、なんでこうなったか分かるかい」
首を振る。こうも何も、まったく話が見えない。

「まったく、どこまでいい子ぶるんだい。
――あんた、気取りすぎなんだよ」
「え……？」
考えたけど、意味が分からなかった。
意を決して、訊く。

「……どういう、こと？」
訊いたら、シーモアがよけいに怒った。
「それが気取ってる、っていうんだ！」
「ごめん、言ってる意味……わからない……」

彼女が怒ってしまったのは分かるけど、言われてる意味が分からない。
よほど何かに触ってしまったみたいで、シーモアがすごい剣幕で、吐き捨てるように言う。
「だから、ここはあんたみたいなお嬢さんが来るとこじゃないって言ってんだよ！」
これは少し分かった。
何故そうなったかは分からないけど、何か勘違いされたんだって

ことは分かる。
だから、答えた。
「あたし、そんなじゃ、ない……」
でもシーモアには、伝わらなかったみたいだ。

Episode：28

「嘘言ってんじゃないよ。あんたが持ってるものなんて、どれも高級品ばっかじゃないか。
――特にその太刀！」
「え？」
また意味が分からない。
「だって、そうじゃなきゃ……」
きちんとした武器や装備を携行しなかったら、生き延びることさえ怪しくなる。自分の装備に責任を持つのは、初歩の初歩だ。
けどシーモアの考え方は、少し違うみたいだった。

「だからお嬢さんだってんだよ！！」
激昂した彼女が、あたしに手を伸ばしてくる。
そこから先は、考えるより早く身体が動いた。
身体を入れ替えてかわしながら、一瞬のちには、あたしはシーモアの首に太刀を押し付けてた。
動けなくなった彼女を見て、泣きたくなる。

「お願い、こういうの、やめて……。とっさだとあたし……殺しちゃうかも、しれない」
太刀を納めながら、やっとそれだけ言った。
泣かないように奥歯をかみ締めて、でもやっぱり、涙がこぼれる。
「あんた、いったい……」
シーモアの問いに答えようとしたけど、上手く声が出せなくて、答えられない。
そのとき、感じた。

思考回路が切り替わる。五感が研ぎ澄まされる。
ひさびさの、『戦う』感覚。

「あんたさ――」
言いかけたシーモアを手で制す。
洞窟の奥から、気配の質が変わったのを感じる。

――逃げ場は？
ダメだ、海と崖とに囲まれてて、行き場がない。
唯一の逃げ道は上だけど……あの足場を伝って登るのに、どれだけの時間がかかるか。
なら、方法はひとつ。
そのとき洞窟の奥から、くぐもった音が響いた。

「な……」
中から、“それ”が姿を現す。
「飛竜……！」
彼女の様子に、今初めて敵の正体を知ったのだと気がつく。
――これが、ふつうの同い年の子なんだ。
そんな驚きを感じながら、出てきた飛竜を睨んだ。

竜にしては、かなり小さい。それにたしかこれは、知能もそんなに高くない。でも人間を捕食する、獰猛な種類のはずだった。
よく見ると、翼が折れてる。だからこの洞窟で、治るまで潜んでるつもりだったんだろう。しばらく食べてないみたいで、気が立ってる感じだった。
それを知らずに縄張りに入り込んだあたしたちも、迂闊だったとは思うけど――エサにはなりたくない。

浮き足立ったシーモアに、言う。

「先に、戻って」
「なんだって？」
彼女から返ってきたのは同意じゃなくて、疑問だった。
「だから……今のうちに、逃げて」
「冗談言うんじゃない、あたしだって戦えるよ！」
「バカ言わないで！」
思わず言い返す。状況が分からないにもホドがある。

Episode：29

「あなたがいたら、全力出せない！」
「なっ……」
絶句するシーモアに、さらに言う。
「せめて、下がって。じゃないと、心中だから」
「――わかった」

やっと彼女が下がったけど、状況は不利になった。もう気づかれてしまってる。うまく逃げられればと思ってたけど、ムリそうだ。
飛竜が動きを止めて構えたのを見て、とっさにシーモアに体当たりする。
直後、炎がさっきまで居た場所を駆け抜けた。

「行ける？」
「あ、あぁ……」
炎を吐かれてやっと、どれほど危険かを飲み込んだみたいだ。
「けど、あんたは？」
「ひとりなら……だいじょうぶ」
本当はちょっと不利だけど、それは言わなかった。それにひとりの方が楽なのは、たしかだ。

「目くらましで低位魔法、使うから。その間に」
「分かった」
間をおかず、立て続けに低位の、炎魔法を放つ。
飛竜の注意があたしに向く。
「早く！」

シーモアが隙を突いて、回り込むように走った。

――良かった。
飛竜は彼女に気がついてない。あたしと、あたしの魔法に完全に気を取られてる。
これなら、あとは崖を登りさえすれば……。

そのとき、視界の隅に思わぬものが映った。
崖を降りてくる、三つの人影。
飛竜を牽制しておいて、そっちに視線を向ける。

――イマド？
たしかに目が合った。
彼が「やれるのか」と、問いかけてるのが分かる。
隙さえ作れれば、あたしがそう思いながら見返した瞬間、彼が動いた。身長の倍近い高さから、一気に飛び降りて、走る。

「こっちだ！」
大声を上げながら、魔力石をばら撒く。
そこへ、銃声。絶妙のタイミングで、いっしょに来てたミルが、弾を撃ち込んだ。
飛竜が完全にそれに引っかかって、イマドたちのほうを向く。
魔力石が撒かれた場所へ、足を踏み出す。

――爆発。
次々と石が爆ぜ、炎を上げた。
飛竜の動きが止まる。
「幾万の過去から連なる深遠より、嘆きの涙汲み上げて凍れる時となせ――」

すかさず、呪を唱えながら走りこむ。
飛竜の身体の下へもぐりこんで、手を触れる。

「フロスティ・エンブランスっ！」
至近距離での発動が、竜族の持つ魔法障壁を打ち破る。
身体の中から凍り付いて、飛竜は倒れた。

Episode：30

◇Ｎａｔｔｉｅｓｓ

信じられなかった。

イマドとかといっしょに、危ないって知らせるために、シーモアたちを追いかけて。

途中でイマドがいきなりスピード上げて、あたしも慌ててくっついてって、崖を降りたの。けど降りきらないうちに、洞窟から飛竜が出てきちゃって、修羅場になった。

なのに……倒されたのは、飛竜のほうだなんて。

たしかに連係プレーで、ルーフェイアったら後ろからの不意打ちだったけど、それでも。

あの魔法、たしかふつうに覚えられるやつの中じゃ、最上級クラス。しかも、威力だってハンパじゃない。

飛竜が倒れてから少しして、やっとルーフェイアが緊張を解いた。

――寂しい横顔。

誇らしげとか、そういうのはまったくナシ。むしろ、悲しそう。

自分のしたこと、嫌がってるみたいにも見える。

だからなんとなく、分かった気がした。

ルーフェイアがここへ来た理由、たぶん……これだよね。

その辺のＭｅＳなんかじゃ、手に負えない。それどころか、このシエラの本校でだって、ずば抜けちゃってる。

あたしから見たら、それってすごく羨ましいけど。でもルーフェイアにとってはそれ、すごく嫌なことみたいだった。

「ルーフェイア、あのね……」
崖から降りて、なんて言っていいかわかんなくて、でも話しかけようとして。けど、できなかった。

「このバカっ！！」
いきなりイマドの怒鳴り声。ルーフェイアの胸倉掴んでる。
「な、なに？」
「また平気で、ひとつ間違えば死ぬようなマネしやがって！！」
すごく怒ってるし。まぁ、分からないでもないけど。

「でも！　それに、倒さなきゃみんな、死んじゃう」
「そういう問題じゃねえだろうがっ！！」
あたしとシーモア、顔を見合わて。だっていきなり、痴話喧嘩見せられるとは思ってなかったし。

「ねぇ、止めたほうがいいのかな？」
「多分そのほうが、いいんだろうけどさ……」
シーモアも呆れ顔。
「放してっ！！」
ルーフェイアも、たしかに嫌がってるんだけど。

でもあの子が本気なら、イマドあっさり倒されちゃってそうだし。それしないんだから、手加減してるんだろうな、なんても思うし。
そうは言ってもこのまま放っておくわけにもいかないから、とりあえず2人を引き離してみた。
でも剥がしてみたら、怒ってたのはイマドだけみたい。

Episode：31

「てめぇら離せ！　俺はテメーらとじゃなくて、ルーフェイアと話があんだっての！」
「――イマドぉ、落ち着きなよ。なんかカッコわるー」
「ンなのかんけーねーだろっ！」
ぎゃぁぎゃぁウルサイったらありゃしない。
ルーフェイアのほうは、けっこう落ちついてた。

「――あんた、ケガないのかい？」
シーモアがルーフェイアに聞く。
「あ、うん、だいじょうぶ。
それよりあの、さっき……ごめんなさい……」
「え？」
シーモアが驚く。あたしも驚いた。だって彼女に謝られるようなこと、心当たりないもの。

「だってあたし、さっきひどいこと……言った、から」
「シーモア、なんか言われたの？　とゆか、ルーフェイアが言うってなんか珍しくない？」
思わず言ったら、シーモアも苦笑して。
「言われたってホドのことじゃ、ないけどねぇ。あれに限っては、ルーフェイアのほうが正しかったしさ」
「そなんだ」

なのに謝ってるとか、えーっとこの子、もしかしてなんか激しく勘違い？
シーモアが、ルーフェイアのほうに向き直る。
「助けてもらったのは、こっちなんだ。それでいい」

「あ、うん」

見てて思った。要するにルーフェイアって……すっごいおとなしくて、気が弱いだけ？

シーモアに「いい」って言われて嬉しそうな彼女、なんだか小さい子みたいだし。

あんな強くて気が弱いってどうかと思うけど、でもそれで間違いないみたい。だとすると、喋らないのも、イマドたちとばっかりいっしょにいるのも、単純に人見知りってことになる。

――結局あたしたち、なにしてたんだろ？

なんだかあんまりにもくだらなすぎて、笑えてきちゃったり。

あたしたちってばカンチガイしまくりだったっぽいし、この子はこの子で全然違うこと考えてたみたいだし。

何より、あそこでシーモア無視したってよかったのに、わざわざ助けてたし。

シーモアもおんなじこと思ったみたいで、やれやれって顔。

そこへ、ミルが言った。

「ねー、もうそろそろ、こゆのヤメにしちゃえばー？　こんなのしてたって、つまんないもん。

だいいちさ、Aクラスの女子ってば、あたしたち四人だけだしー」

彼女の言う通りかも、って思った。

Bクラスにはけっこう女子がいるけど、Aクラスってば今年はこの四人だけ。だからこそ、あたしたちいつもBクラスの子たちと、いっしょにいるんだし。

で、その四人ばっかしが、ホントに仲悪いならともかく思い違いで……ってのも、なんだかなーって感じ。

けど、Bクラスの子たちがどうかなぁ、なんても思ったり。

Episode：32

ミルが見透かしたみたいに、また言う。
「どーでもいいじゃん、Bクラスなんて。どうせあの子たち、ルーフェイアにはもう関わらない、ってたもん」
「それはそうだけど……」
でもたしかに、考えたってキリないかも。どうなるかも分かんないし。

「それにしてもルーフェイア、あんたいったい、どこでそんだけバトル覚えたんだい？」
シーモアがいちばんの疑問を尋ねたら、ルーフェイアったら下向いた。あんまり、言いたくないことなのかも。
「あー、ルーフェってばね、少年兵あがりだからー」
「ミル、てめっ、何バラしてんだ！」

イマドの矛先がミルに向いたとこみると、これホントみたい。まぁミルは気にもしないで、きゃぁきゃぁ言いながら逃げ回ってるけど。
「あ、でもでもね、それ以上はナイショだよー」
「当たり前だろバカっ！」
狭い海岸をミルとイマドったら、二人で追いかけっこ。言ったら怒りそうだけど、子犬のじゃれあいみたい。

なんかもう、ペース乱されっぱなしかな。
おかげでなんだかぜんぶどうでもよくなっちゃって、ため息ついて、ルーフェイアに言ってみた。
「ルーフェイアって、どっかのお金持ちのお嬢さんで、遊びでここ来たと思ってたの」

最初の誤解の出発点、どうみてもここだし。

「え……あたし、そんなじゃ……」

「あ、うん、今は分かる」

こんなことだなんて、想像もしなかった。でも冷静に考えてみればたしかに、お嬢さんが遊びでとか、ありえないし。

「そのね、その太刀とか見てね、そうかなって。すごくいい物みたいだし。

――それ、どしたの？　もらったの？」

ちょっと気になるから訊いてみたら、ルーフェイアの表情が沈んで、目に涙が浮かんだ。

「兄さんの、形見……」

「え、あ、ごめっ！　そういうつもりじゃなかったんだけど、そうなんだ……」

悪いこと訊いちゃった。でもおかげで、何がどうなってるかはだいたい飲み込めたかも。

要するにルーフェイアったら、少年兵上がりでお兄さんと前はいっしょで。でもそのお兄さんは亡くなっちゃって、ここへ来たってことみたい。

本校へ直接来たのも、事情が事情だし、別に成績も悪くないから、ってことなんだと思う。いろいろきちんとしたもの持ってるのは、お兄さんが何か財産みたいの、残してくれてたのかも。たまにそういう子いるし。

必死に涙拭いてるルーフェイアの前に立って、シーモアが言った。

「ともかく、悪かったよ。あたしらの思い違いで、いろいろさ」

潔いな、って思った。

シーモアはけっこう性格キツいけど、悪いと思えばちゃんと謝る

し、ふだんはだいたい公平。だから彼女のこと、あたし好きだった。

「許しちゃもらえないかもだけどさ、でも、ごめん」
「あたしもゴメンね。もうヘンなこと言わないから」
ルーフェイアが顔を上げる。
「みんな、許して、くれるの……？」
『いやそれ反対』
思わずそこにいたみんなが、突っ込みいれちゃったり。

「こっちが謝ってるのに、なんでそうなるかな、あんたは」
「そうだよねぇ、ルーフェイアが悪いこと、したわけじゃないし」
「ごめん……」
また泣きそうになるルーフェイア。すっごいこの子、泣き虫かも。

「まぁまぁまぁまぁ、ここは穏便に、ね？」
ミルが意味不明なこと言い出して。
「誰も争ってねーだろ」
「あ、そぉ？
ともかくさ、ルーフェもナティもシーモアも、なかなおり！」
強引にあたしたち三人の手を取って、重ねあわせる。

「よし、仲直りの握手おっけー！　ぜんぶばっちり！」
「これ、握手かなぁ……？」
「細かいことは気にしちゃダメー」
ミルのペースに引きずられて、あたしとシーモアとルーフェイア、互いに顔を見合わせてつい笑った。

「ま、いっか。ちょっとヘンな気もするけど、これ以上めんどうだし」
「だね。これで終わりにしとこう。なんかあったら、ミルの責任っ

てことでいいじゃないか」
「えー！」
ブーイングあった気がするけど、それは無視して。
「ヤバいな、暗くなってきた。減点食らったらマズいし、そろそろ引き上げよう」
「そだね。ルーフェイア、一緒にいこ」
「――うん」
あたしたち、みんなで歩き出した。

◇お知らせ◇
5／21より、第5作「温もり」を連載中です。
このサイトで検索するか、筆者サイトからお入りください。今までと同じく“夜8時過ぎ”の更新です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1137e/

葛藤　ルーフェイア・シリーズ04

2011年2月6日15時32分発行